

3. 寄稿: いっしょに「探見」の発見と活動を (江戸探見家、元朝日新聞記者 森治郎)

朝日新聞社を定年退社後の20年のうち15年ほどを「江戸探見家」の名刺を持って世間を渡っている。

「探見」とはどんなことを意味するのか。私が編集発行人を努めている月刊メールマガジン『探見』の題字の横に「ゆっくり歩いて、見て、聞いて、(許されれば)触れて、読んで、知る。そしてそのことを楽しむ」ことである、と記してある。その「定義」に行き着くまでに7、8年の時間がかかった。

こののはじまりは、2006年秋に朝日新聞都心部読者を対象にしたコミュニティ紙に「大江戸探見」という連載を書いたことにある。

朝日新聞社を定年退職後担当していた早稲田大学での授業も終わりかけたころ、それまで趣味として読んだり歩いたりしていた「江戸」を少し深掘りしてみようということで朝日新聞社での後輩だったそのコミュニティ紙の編集長に「書かせてほしい」と言ったのか、「書いてほしい」と頼まれたのか、とにかく始まった。タイトルはその連載にあたってひねり出したもの。ついでに数カ月後には「早稲田大学客員教授」という肩書がなくなる(し、それでは硬すぎる)ので、「江戸探見家」を名乗ることにした。

「探見」は、私オリジナルのものではない。いくつかの書名に使われていた。何よりも朝日の先輩が『東京探見』という本を出していた。その先輩の“許し”を得ての名乗りだった。ウィキペディアで検索したところ、「探見家」はほかにいなかった。

「探見」が少し進化したのは、連載が縁になって朝日カルチャーセンターから同趣旨の野外講座を頼まれたことからだった。街歩き講座であることがすぐわかるように「大江戸まち探見」とした。2010年7月のことだった。そのときの受講者募集のチラシにこう書いた。

「江戸はもちろん明治大正も、そして昭和の風景さえ遠くなったといわれます。しかし、都心には江戸の町で育まれた文化、築かれた建物、道路、庭などが時の流れと災害、破壊の大波に

	<p>2022年11月号 (通算140号) 第1部</p>	<p>探見とは「ゆっくり歩いて、見て、聞いて、触れて、読んで、知る。そしてそのことを楽しむこと」である。 共同創刊者 酒井憲一、森治郎</p>
<p>島田叡・斎藤隆夫・田中静彦・碧川かた 横家さんが4冊で描いた 「この人たちを見よ」</p>		
	<p>本誌の今年4月号に『男ひとり』『非日常の世界』を求めてLet's enjoy LCR (格安鉄道切符) trip を書いてくださった横家伸一さん(72歳)が、先月『赤とんぼの母』を出版されました。童謡『赤とんぼ』作詞の三木露風の母で、看護婦の草分け・参政権をはじめとした「婦人の権利」獲得のために奮闘した碧川かたの生涯を描いたものです。</p> <p>横家さんは兵庫県教育委員会の職員を退職後、2013年に『男ひとり...』を出された後、15年に『俳句の春櫻 戦後の沖野県知事・島田叡』、19年に『秋霜に生きる 源高の政治家・密蔵院天』、21年に『八月十五日 終戦秘話・宮城事件 東郷軍司令官田中静彦伝』(いずれも文芸社刊)と、次々に上梓されています。</p> <p>取り上げた人物は、いずれも横家さんのふるさとであり現在もお住まいの兵庫県にゆかりがあります。それ以外に共通点があります。それは、終生「命」を大切に、それを守るための努力とそのことによって生じた「圧力」に屈しなかったことです。その後らがどんな人であり、どんな人生を歩んだのか、そしてなぜ「彼ら」を取り上げたのか、横家さんに再度尋ねていただきました。</p> <p style="text-align: right;">◆</p> <p>私はこれまで我が国の近代史、なかでも明治維新から太平洋戦争までに注目してきた。その間</p>	
		

耐え、いたるところで生き続けています。ゆっくり歩いて、じっくり見て、ちょっぴり想像力を働かせれば懐かしい風景が浮かんできます」ここで「探見」の意味が少し深くなった。そして半年後、その講座のことを知った15歳上の先輩から「メールマガジンを作って、探見コンセプトを広げようよ」と声がかかった。その先輩は定年退社後、アメニティ（快適生活環境）・江戸文化研究者として何冊もの本を出しており、私など足元にも及ばない探見家だった。

2011年4月、『探見』を創刊した。それにあたって2人で考えたのが、題字横の「探見」の定義である。これで「探って見る」だけのものにはかなりの明確な内容と手法を加えることができたように思う。ただし、最初は「ひたすら歩いて」だったが、5年ほどして「ゆっくり」に変えた。「無理しないことがなにより大事」。2人の加齢によるものと思いたくないが、とにかくそこへ行き着いた。



「間近で見る、聞く、感じる」ことが「探見」のモットー。
川越まつりの「曳っかわせ」を蔵造りの町並みに面した商家の2階から



現場へ行くと現状がよくわかる。
タワーの下の徳川將軍霊廟（芝・増上寺で）

それがよかったのか、ツアーの参加者は盛況で、その報酬がメールマガジン発行の費用を支えてくれた（「自由な誌面づくりとより多く読んでいただく」ため、原稿料などの費用はすべて自腹としていた）。ところが2年半前に先輩は91歳の4日前に熱中症から肺炎を併発し亡くなった。そして今年9月、朝日カルチャーセンターの野外講座のうち定期的なものは、コロナ禍などの影響ですべて休止になった。「大江戸まち探見」も120回、延べ2000人の参加で終了した。私は「探見」活動の二人三脚の相手とたくさんの同行者を失ってしまったわけである。

しかし、まだたくさんの仲間がいる。メールマガジン『探見』発行に協力していただいている幹事と読者である。幹事は10人。読者はまもなく1000人。ぜひ、このメール読者の皆さんにも作り手あるいは読者の列に加わっていただきたい。きっとさまざまな活動への「ヒント」と「エネルギー」を得ていただけたらと思うからである。そして「探見」に新しい意味と活動を加えて、元気をなくしているこの国の再生に役立てたいものと考えている。